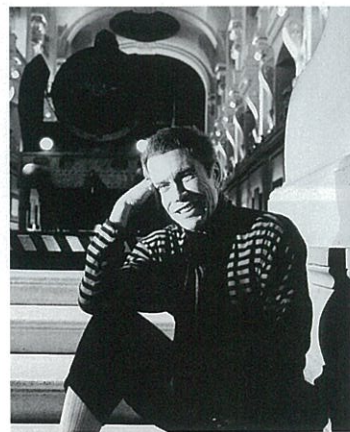


ミュージーズに打たれ、つかんだ何かを表現する。

「会場を観察した時、あまりの広さに、個展の話を通ろうかと思つたほど。空間の犠牲になりたくなかつたからね」
ここはパリの国立装飾美術館。クリエイターのジャンポール・グードが、自ら展示デザインを手がけた回顧展の会場だ。「だが、革命200年記念パレードの機関車を中心に据えることで、会場のイメージが決まった」。吹き抜ける大天井の大広間、中央に陣取る巨大機関車は威風堂々、グードの世界をひと目で印象づける存在だ。

その足跡を追う者の目に強い印象を残すのは、グレース・ジョーンズからカレン・パークに至るミュージーズの姿。彼の美意識は彼女たちの定型外の美を察知し強調し、理想のバランスを表現することで強いメッセージを発信してきた。美しい彫刻に恋するあまり、彫刻が命を得たのがギリシア神話のピグマリオンの物語なら、グードの物語は「グードマリオン」。本展のタイトルであるこの語は「グードは生身の女性に恋して彫刻に変えようとする」と言った哲学者エドガール・モランの造語だ。「ある女性に出会う。その美やしぐさ、精神性に打たれる。僕は彼女を捕ら

え、何かをつかもうとする。僕は、その一生懸命つかんだ何かを表現する。ミュージーズたちの歴史は僕のインスピレーションと存在の歴史だ」
イラストから出発した彼をスペクタクルの世界へ導いたのは、グレース・ジョーンズのライブ演出だった。「この展覧会に、できればもつとスペクタクルの要素を取り入れたい。会場のあちこちにCFの登場人物が飛び出して来たら面白いだろう?」。そのシーンを思い描くように、彼は目を輝かせる。「この回顧展を率いて世界を巡りたい。目前の企画は『ジャンポール・グード・ショー』の実現だ」



Jean-Paul Goude

●1940年生まれ。60年代にモードのイラストレーションで認められ、70年代、ニューヨークの「エスクワイア」誌の伝説的アートディレクターに。89年、革命200年祭の大パレードを手がける。80年代以降はコダック、シャネルなどの広告で活躍。

「グードマリオン。ジャン=ポール・グード回顧展」の会場、パリの国立装飾美術館の大広間にて。革命パレードに登場した機械仕掛けのマネキンを前に。展覧会は3月18日まで。
www.lesartsdecoratifs.fr

